

# 成溪會誌

1999.1 No.88



## 特別寄稿

建築の耐震構造

富井 政英……………2

中国への視点

— よりよき理解のために —

竹内 克之……………6

## 随想

私は成蹊大学聴講学生・五年生

加藤 泰佑……………10

コーヒーの話

— カフェ・パウリスタ —

長谷川泰三……………12

中学入学のころ

吉川 英明……………14

成蹊柔道部七十年小史

長澤 陽一……………15

小さなみそ屋の手前味噌

飯田又右衛門……………17

私の故郷『しゅぜんじ』

植田 治俊……………19

桑名の街をご案内!

水谷 元……………20

表紙絵の言葉 / 23 四大学運動競技大会 / 23

新聞記事より / 22・52 会員動静 / 40 物故会員 / 52

第38回成蹊会謝恩顕彰会 / 53 予告 / 57

成蹊学園の近況 / 58 学園史料館資料紹介 / 64

図書館蔵書紹介 / 66 国際交流センター / 67 成蹊会報告 / 68

## 同窓のつどい

● 学校・年次会のつどい……………24

高校創立50周年祝賀同窓会 わかくさ会の生いたち

桃林会 旧高尋常科最終学年卒業50周年

旧高卒業55周年クラス会 高校卒業20周年

旧高24回(文・理)懇親ゴルフ会 高校卒業40周年

● 体育会・文化会OB会……………29

ラグークラブ桜祭 バレーボール部50周年

旧高インターハイラグーの集い 旧制高校滑空班

成蹊ヨット部OB会 地理研OB会

茶道部創立40周年

● 業界・企業をつどい……………32

山武グループけやき会

● 地域のつどい……………33

タイ成蹊会 ニューヨーク成蹊会

オーストラリア・クイーンズランド成蹊会

新潟成蹊会 長野成蹊会 茨城成蹊会

千葉支部総会 渋谷成蹊会 川口成蹊会

京滋成蹊会 大阪成蹊会

● 寮歌祭……………38

北海道寮歌祭 信州寮歌祭 広島寮歌祭

表紙の題字は故上條信山先生、絵は高山知也(文・51年)

# 随想

## 私は成蹊大学聴講学生・五年生

かとう たいすけ  
加藤 泰佑

私は目下、成蹊大学法学部、経済学部一般聴講生として週二〜三日登校しており、もう五年生となりました。聴講生は毎年百二十〜百三十名、七高、東大卒の方で会社退任後、二五年間、成蹊に通いつづけている凄い超人もおられ、私などほんの序の口です。もともと五五才になったら会社の役職を辞し大学院に再入学することを夢見ておりましたが、仕事の都合上それ

が八年も遅れた為目標を絞り、受講科目を集約して学部聴講生としてスタートすべく計画を練り直しました。

鎌倉の自宅から近い慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの総合政策学部と、通学に二時間かかるが気心の知れている成蹊大学のいずれにすべきか自分なりに検討しました。慶応の新キャンパスの授業は教授と学生のいわば「格闘技」まことに魅力的でしたが体力勝負

となつたらとても持つまい、ならばOBである成蹊に行こう、少数教育を方針とし、教授と学生の双方向型の授業の多い本学で目的がかなえられると予想したからであります、結果は賢明な選択であったと思っております。

### 大学への帰郷

#### 自分を知らなく

#### この国を知ること

◎大学への帰郷の目的は、二つあります。失いかけていた私自身や、この国の「現在位置」を再考すること。戦後五〇年の間、坂の上をめざして走り続けた「私」。いったい今、どこにいるの、周りを見えているの。

日本、欧州、米の政治、外交、経済の近現代史と、日本の近代国家への成立過程をアジアの眼で検証するため、朝鮮、中国、東南アジアの個別講座を選択しました。

(一) 現職時の仕事を国際関係の中で検証すること。国際法をはじめ諸外国の制度研究もあり法学部の受講がふえ、文学部にも行きます。いよいよ難解なエリアに入りました。

仕事に関連したテーマは、信託銀行におりました関係から、戦中、戦後

の信託会社の「敵産管理、連合国財産の返還業務」『朝鮮開国一八七六年(明9)以降、現在にいたる「日朝・日韓の金融関係史」』が目下のテーマで現在進行中であります。

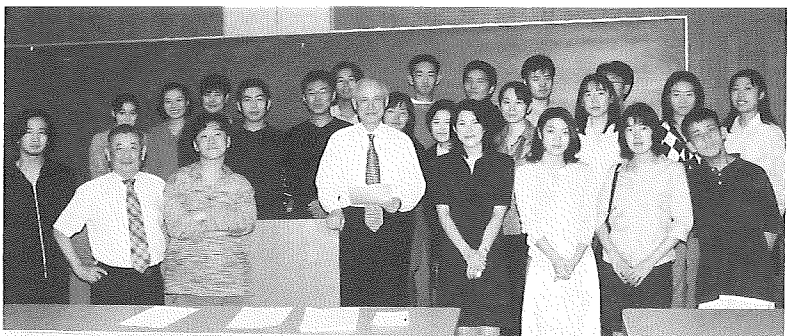
### 只今、成蹊生活を

#### 大いに楽しんでいきます

◎さて、えらそうな事を長々と書いてしまいました、私、只今、成蹊生活を大いに楽しんでいきます。自分の息子、娘より若い学生諸君と机を並べ、学生食堂で食事を共にし、また、私と同年又は若い教授、助教各位から専門の話しを伺ったり、また対談もする、キャンパスで若いエネルギーをもらい、新しい知識を授け、知恵を磨く、最大の幸せであります。

ちなみに一教科の年間授業料は五万円(六〇才以上二〇%引き、四万円)です。

◎毎年三月の卒業式のシーズンに、私は今迄になく切ない程の哀感を抱きます。欲談を共にした学生諸君が巣立っていく、特にそれが女子学生の場合、手塩にかけた娘を嫁がせる父親の気持ち「体に気をつけろヨ」「へこたれるなヨ」「幸せていろヨ」今迄採用側で見えなかった私にとって、この三月



授業(東洋政治史)が終わって — 宇野教授と共に(筆者左から2人目)  
平成10年9月28日4時限

は最も気持ちが揺れ動く一カ月となりました。卒業生は去り、新入生がまだ入ってこない四月第一日曜日の「桜祭」花吹雪の中で「いい日旅立ち」を心の中で歌います。

◎ところが四月も一〇日を過ぎると二千名以上の新入生がどっと入って来て新緑に包まれた成蹊キャンパスは一気に活気づき、私はハイな気分になり

ます。好天の五月〜六月の昼休みは本館前庭や研究館の中庭の芝生は円陣を作って語らう男女学生で一杯になり、旧制高の寮歌の一節、「今別れてはいつかまみえん、橄欖の花のもと再び語るこやあらん」その橄欖の花のものと語らい、私の好きな光景がつづきます。

### 成蹊の学生で

#### 気になることがあります

◎ここで最近の成蹊の学生について私なりに思うこと、気になることをあえて申し述べたいと思います。ご承知のとおり大学入学者は一般入試に加えて、外部・内部の推薦入試・帰国子女入試等を通じて決定されますが、入学者の大多数を占める一般入試合格組に成蹊を第一志望としていなかった学生も当然あります。その第一・三志望組も、成蹊の学風を味わい、教室で少数教育の真価にふれ、早速、一年から始まるゼミに出席し乍ら、「成蹊に入學して良かったと今あらためて思う」「成蹊って案外いい処だ」「成蹊大学新聞記事」と変り、一年の夏休み迄にほぼ定着する。これは素晴らしいことです。しかし第二、第三志望の葛藤から逃れられず悩む学生も僅かでしょう

が残ります。

ところで勉学もソコソコ、遊びもソコソコと言う成蹊にとって真に厄介な「ソコソコ生活習慣病」が自覚症状のないまま一部の学生が罹病しています。前述の学生と罹病の学生とオーバラップするのどうか判りませんが、成蹊は参加型の学生には大いに応えてくれる反面、そうでない学生にはそれなりなだけにこの部分は一刻も早く解決せねばなりません。

◎「昔(創立当時)」と比べて今の成蹊大生はどう?」との質問をよく承ります。油断すると答えは「昔は良かった」式となりかねませんので、その頃と今では大体、別の国に変わっていると、まず申し上げておきます。でも、発足時と今と学生が違ってきている点を二つあげてこの小文の結びといたしたく思います。

### 宇野学長―伝統の中から普遍的要素を引出して、伝統の革新を

岩崎会長―伝統の革新のもとで育った若者を成蹊会に迎える日

が楽しみです。

(一) 小冊子「成蹊大学」に宇野重昭学長(現専務理事)と岩崎英二郎成蹊会会長のすばらしい対談のつてお

ります。「少数教育と個性の尊重を徹底し、人間主義と実学を車の両輪に、魅力ある人間を育てる」成蹊イズム」を中味の濃い言葉でお二人は語っておられます。これが役所の作文でしたら九〇%割引いて余り信用しませんが、成蹊の講義なり、部活の現場に通う私は「その通り」「その方向にむかっている」と申し上げることが出来ます。宇野学長は更に、「伝統の中から現代に通じる普遍的要素を引出していくことを「伝統の革新」と語り成蹊教育の創造の指標とされている。まことに深遠な「眞理」と思います。ここで私は「目の鱗」が落ちました。どんなに教授陣が頑張られても今の成蹊大学生に欠けるものそれは「眞理の探究心」ではないのか。

旧高から大学まで戦後世代の学生の共通の言語であった「眞理の探究」この言葉は今、死にかけています。哲研、社研、社思研はありません。ものを深く考えなくなつたらそれは脳死、人間の死ではないのでしょうか。

(二) 成蹊の講義に双方向型が多いことは前にも述べましたが、パターンとしては講義終了後、規定のメモに質問、意見、要望をその場で記述して名前を書き提出する。そして次の時間で教

授から整理して答える。或いは必要であれば授業内容の軌道修正を行う。

一年から始まるゼミはクラス二〇名見当、本学のカリキュラムの他の大にない特長ですが、参加指向をもつ学生にはまことに魅力的なものです。部活もディベート、模擬裁判等、討論、参加型に変わり、弁論部の大演説はない様です。今の学生は幸せだと思ふ部分です。

ところで旧高大学発足の授業は一方通行型でそれなりの感動的言葉が教授から聞かれましたし、特に「開講初日」と「最終授業」は決まって格調高く素晴らしい言葉でしめくられた教授が多かったことをOBの方々はずしも経験と思ひます。

現在も最初と最後は受講者であふれ

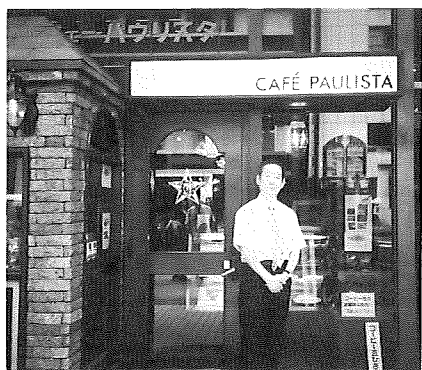
でも趣旨が全く違います。最初は「ノートを取り易いか、板書はわかり易いか」の検証であり、最後は期末試験要項を取材するための目的が多い様です。試験の範囲は○頁から○頁までと教授も中高生並みに説明される。全く嘆げかわしい、学生も学生だが、教授も甘いのでは—との見解に、「これをしてしないと翌年度自分の講義を聞く学生は確実に少なくなる」とのことです。

で、銀座8丁目にある「カフェ・パウリスタ」は今日、日本でコーヒーが一番美味しい喫茶店、との評価を受けています。

(儲ける)と言う日本語は(信者)と書くと思いますが、まことにファンのお客様はありがたく、社員には日頃「社長の私から給料をもらうのではない。お客様からお給料をいただいている」と申し聞かせ、コーヒーの品質とお客様へのサービスを徹底させております。

### 世界と日本のコーヒー事情

世界のコーヒー生産量に占めるシェアはブラジルが30%、コロンビアが12%、インドネシアが7%、ベトナム、メキシコが各6%、この上位五カ



た。

「単位」や「優」の数、「資格」の数、そして卒業証書(学位記)ひとつひとつ自身史の記録の証でまことに大切なものですが、それはやはり「紙」です。その紙はその人の能力の裏打ちがあつてこそ「担保付証書」となりま

終身雇用型主流の日本の社会にあつてはどうしても昇格、昇任辞令書でその人の評価が定つたり、また、お金さ

## コーヒーの話

### 「カフェ・パウリスタ」

はせがわたいぞう  
長谷川泰三

#### 銀ブラの語源となつた喫茶店

鬼の如く黒く

恋の如く甘く

地獄の如く熱く

(大正六年十一月一日、主婦の友第一巻)

この広告が珈琲の広告とわかる人は相当なコーヒー通でしょう。家業の「カフェ・パウリスタ」が一杯五銭のコーヒーを日本人に飲ませるために考へた広告史上の名作です。カフェはポルトガル語の珈琲でパウリスタとはブ

えも紙幣が主流です。その「紙」が本物であるためには—表面に書かれた文字と価値が一体のもの、「正貨」スペーシになることと私は思います。「札束になるな、金貨になれ、正貨になれ」と私は学生諸兄に「祈り」をこめて訴えつづけ、そしてそれは私共OBにも共用する目標であり課題だと思ふのであります。

国際経済研究センター (政経・29年)

ラジル珈琲の名産地であるパウリスタ州のこと。このパウリスタ州のコー

ヒーを無償でもらい、日本人に珈琲を普及する目的で設立された会社が「カフェ・パウリスタ」で私がその四代目に当ります。

明治四十三年、銀座の町に突然、白亜三階建てのコーヒーハウスが誕生しました。この店こそわが国の(喫茶店)の原型となつた「カフェ・パウリスタ一号店」です。正面にはブラジル国旗がひるがえり、夜は金色に輝くイ

食塩をすこし加え、白いハンカチを一晩漬けて、よく水洗いして陰干しすると綺麗な珈琲ハンカチが出来上がりま

#### カフェ・パウリスタと文学

カフェ・パウリスタ一号店は明治43年、銀座の「時事新報社」前に開業しました。このため編集長の菊池寛が毎朝コーヒーを飲みにきました。原稿を届けにきた芥川竜之介の小説に「パウリスタ」の記述が多いのもうなずけます。大正リベリズムを満喫する文化人にとって「パウリスタ」の存在は今や無くてはならない喫茶店になったのです。

北原白秋が「パウリスタ」の店内で

やわらかな

誰が啜みさしし珈琲ぞ

紫の吐息ゆるくのぼれる

と歌えば

吉井勇は

珈琲の

香にむせびたる夕べより  
夢見る人になりけらしも  
と返しました。当時、慶応の学生で

ルミネーションにひとびとの胸はときめきました。中に入ると北歐風マントルピースのある広間に、大理石のテーブルとロココ調の椅子が並び、海軍下士官の白い制服を着た美少年の給仕が銀の盆にのせたコーヒーをうやうやしく運んで来ます。その宣伝方法も奇抜で、身長190センチの大男が燕尾服で正装し銀座の町を練り歩き、コーヒー試飲券を配つたりしたそうです。

「カフェ・パウリスタ」は日本の自由主義の発祥の地ともなりました。コーヒーハウスの二階は男子禁制の「レディースルーム」で鏡がふんだんに使用されておりました。「青いストッキング」をはいいた「青鞥」の女性たちの愛用するお店になり、平塚雷鳥や与謝野晶子がいかに珈琲を飲みながら婦人開放や新思想を熱く語りあいました。

新しい流行を取り入れる事に敏感なモボやモガは列をなして「カフェ・パウリスタ」に押しかけ、一日4000杯のコーヒーが出たそうです。そして久保田万太郎は著書の中で「一杯五銭の珈琲を飲み、パウリスタに行く事を(銀ブラ)と言った。これが銀ブラの語源である。」と書いています。

たくさんフアンのお客様のおかげ

あつた奥野信太郎は「酒場今昔記」の中で次のように記述しています。

「あの黒地に赤い文字を抜いたパウリスタのコーヒー缶を買って帰るとき、それがまるで新時代そのものような新鮮な感触を与えた。当時エブリマンズライブラリーが一冊50銭ロータスライブラリーもまた50銭から70〜80銭見当。そこでパウリスタのコーヒー缶とこの50銭本一冊とを買い求め、家路をいそぐときの心喜びというものはたいしたものである。太陽は常に我等の上に明るく、新しい世はわれらの手で、とまではいかにないにしても、いっばし新時代の知識人みたいな気障っぽい顔をして、低俗共を見下すような気持を快しとした。」

奥野の人生にたいするたしかな希望と使命感がうかがえて面白いと思ひます。

「カフェ・パウリスタ」を愛し、パウリスタコーヒーを愛した文化人は宮沢賢治、高村光太郎、高村智恵子、小泉信三、佐藤春夫、釈超空、田谷力三、藤原義江、宇野浩二、田村俊子、久保田万太郎、サトウハチローと枚挙にいとまなく、それぞれがパウリスタにおもしろいエピソードを残しております。これらの文化人のご研究者の人

から、たくさんのお問い合わせが私の会社に寄せられる事も嬉しいことです。

### おわりに

私は成蹊中学でクラス担任の飛田多喜雄（トンボ）先生から文学の指導を受け、本の読み方を学び、人生の慰めを得ました。成蹊高校では地理研究部で活動し、内田信夫先生はじめ多くの優秀な先輩たちの薫陶をうけました。私が今日まほろしのコーヒー豆を求めて、世界中の生産国を訪れ、道に迷わず外国生産者と楽しくお話しできることは成蹊学園にいたお蔭であり、感謝に堪えません。

どうか皆様、美味しいコーヒーを飲み、また私と語り合う為に「カフェ・パウリスタ」にお越しください。そして毎朝コーヒーを飲んでいつまでも皆様が健康でハッピーであられますように。

カフェ・パウリスタ

中央区銀座8-1-9

長崎センタービル一階

TEL 3572-6160

日東珈琲（高・29年）

意外だったのは、入学式に父が来てくれたことだった。

新しい校舎の前に並んだ新入生の中に混じって、母は来ているかなと見回した私の目に、母と並んで立っている小柄な洋服姿の父の姿が飛び込んできた。

嬉しかったが、何となく照れ臭く、式が終わった後も、二人とはあまり言葉を交わさなかったような記憶がある。

お世話になってる木村さんは、何年も前からの顔見知りだったから、まったくの他人の家にいるような淋しさはなかったが、それでも、夜、ぼつんと一人でいると、吉野村を思い出して胸が詰まった。

だから、毎週土曜日が待ち遠しかった。吉野村の私の家は、二俣尾の駅を降りて十数分歩くのだが、途中多摩川を渡る。

多摩川といっても、もうかなりの上流だから、川幅は狭く、深い溪谷を流れている。そこに奥多摩橋という橋がかかっている。そこからの眺めが素晴らしい。

毎週土曜日の午後、電車から降りてその橋に差し掛かると、私はしばらくの間、欄干にもたれて眺めを楽しん

## 中学入学のころ

よしかわ 英明

ずいぶん昔のことだなあ……そう思いながら、私が成蹊中学へ入った年を数えてみたら、何と四十七年も前のことだった。

改めて、溜息が出た。

こうして数字にしてみると、漠然と遠かった昔が、実は思っていたよりも遙か彼方にあったのだということが、実感として迫ってくる。

真新しい白亜の校舎……昭和二十六年、成蹊中学の新しい校舎が竣工し、私たちはその校舎に入る最初の一年生だった。

新調の制服……私にとって制服という物着るのは生まれて初めてのこと



だ。つい一週間前に見たばかりの景色なのに、何年振りに見る故郷の山河、といった思い入れたっぷりに感慨に耽ったものだった。

家に帰ると大歓迎で、自分が大人になったような気がしたが、事実、親許を離れての生活を始めたことで、それまで見えなかった自分の周囲が、急に

見えてきたのは確かだった。両親の愛情とか、弟や妹の大切さなど、べつたりと家にいたのでは分からない家庭の暖かさを、しみじみと味わい直すことが出来たのだ。

その後、我が家が品川に移って、私は自宅から通学するようになり、私の下宿生活は二年間で終わった。

毎日家に帰れるという事は、当時の私にとって無上の喜びだったが、今振り返ると、あの二年間の下宿生活がこよなく懐かしい。

部屋の窓際にあった南天の赤い実、毎日同じ時間に聞こえてくる隣の家の音大生の下手なソプラノ……そうした下宿の周りの音や光景が、先生方のお顔や同級生の面影、運動会でやったスクエアダンスのロシア民謡のメロ

ディーなどと入り混じって、今、四十年後の私の胸で渦巻いている。

出来ることなら、もう一度あのころ

だった。

そして、東京の学校……当時我が家は西多摩郡の吉野村（現在青梅市梅郷）に住んでいて、村の子供たちには吉祥寺は「東京」だった。

入学式の当日は、そんな晴れがましさと喜びに、朝から胸を膨らませていたのだが、私はその胸の底に、小さな悲しみと淋しさをも潜めていたのを感じ出す。

中学に入ったら、私は吉野村の親許を離れて、西荻窪に下宿することになっていたのであった。

吉野村というのは、青梅線で青梅の四つ先、二俣尾と言う駅で降りる。吉祥寺からは立川乗換えて一時間強の所だから、中学一年生でも通えない距離ではなかった。

だが、そうした距離や時間の問題ではなく、中学へ入ったら、私を他人に預けるというのは、父の既定方針だったようだった。

下宿先は、当時、父のところへ原稿

取りに通って来ていたある雑誌社の編集者で、木村さんという方の家だった。木村さんの家は成蹊に通うには便利な西荻窪にあったから、私の成蹊受験が決まった段階から、父が頼み込んでいたらしかった。

私は、入学式の二、三日前に木村さんの家の六畳間に移った。引越しても、持っていったのは、何冊かの本、叔父に貰ったラジオとレコードプレーヤー、それに好きなレコード数枚だけだった。

細かい物を揃えるために母が来てくれた。

吉祥寺の街で、勉強机、鉛筆や三角定規、上履きの運動靴などを買ってもらった。

夕方、吉野村へ帰る母とそこで別れ、買い物に入った袋を抱えて歩き出すと、言いようのない孤独感に襲われて、思わず涙ぐんでしまったのが鮮烈な記憶として残っている。

草深い吉野村で育った十二歳の私にとって、吉祥寺の商店街の雑踏はまさに大都会だった。

行き交う人はすべて他人、仮面のようになく、無表情な人々の波に揉まれながら、私は自分をひどく小さく感じたことだった。

に戻りたい……陳腐な台詞だが、机に向かつて往時を思い返しているのは、正直そう思うほど甘美な感覚である。

私が成蹊に通ったのは、高校卒業までだった。その後も、恐らく三度ほどしか学園を訪れていない。

私も、今年還暦である。

### あの日の時

## 成蹊柔道部七十年小史

ながさわ よういち  
長澤 陽一

成蹊柔道部は、昨年創立七十周年を迎え、11月2日、盛大な記念式典・祝賀会が開催されました。その時の様子は、成蹊会誌87号に掲載していただき

ました。今回柔道部七十年の歩みを記すようご依頼がありましたので、年代を追いながらまとめてみることにしました。

### 一 創設から終戦まで

我が柔道部は、昭和2年旧制高等学校有志数名の努力によって、成蹊高等学校柔道部として設立されました。初代の柔道部長は下間佐吉先生（成蹊高校教授・大正14年〜昭和22年まで在職）、柔道部師範は桜庭武先生（東京

学園はそれほど変わっていないかもしれないが、西荻窪の下宿先周辺に、当時の佇まいは残っていないだろう。一度時間を取って、あの周辺を歩いてみようかと思っている。

著述業（高・32年）

高師教授・昭和3年〜12年まで成蹊柔道部の師範）で、この両先生のもと、柔道部は着実な歩みを始めました。桜

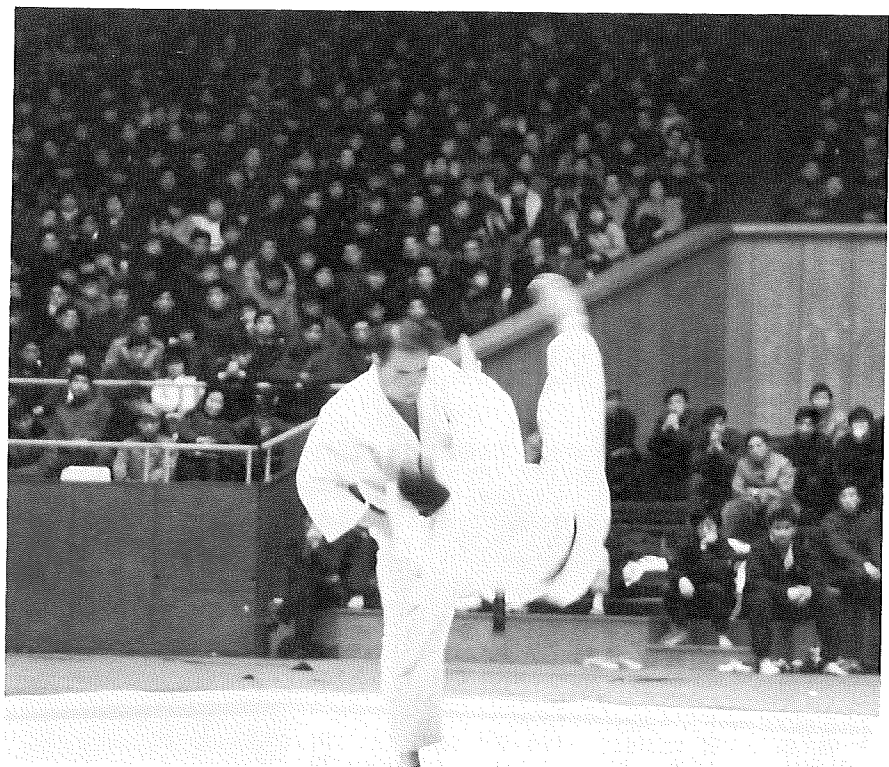
庭先生は、講道館柔道の創始者嘉納治五郎師範の高弟で、本務の東京高師柔道師範のほか、講道館指南役、一高の柔道部師範も兼ね、当時の柔道界で重きをなしておられました。先生は、こ

多忙の身を週一回程度成蹊まで運ばれておりましたが、成蹊が旧制高校であることを考慮され、別にコーチとして、旧制高校の柔道部生活を体験した東大生を次々と派遣して下さい、人間錬成を重視した指導が行われました。この指導方針が柔道部員の心を捉え、やがて柔道部の伝統的精神が育くまれ

てゆくこととなります。

創立当初は部員も少なく、対校戦では東京高校（後の東大駒場教養部）のほか、いくつかの学校と団体戦が行われましたが、メンバーを揃えるのに苦労があったようです。次いで、七年制

高校リーグ戦（東京高校・府立高校〈後の都立大学〉・成蹊高校の三校、昭和15年から学習院が加入して四校リーグとなる）が定期的に行われ、昭和14年から16年にかけて三連覇を成し遂げております。



「投の形」を披露する筆者（昭和55年 上海体育館）

格を執望し、一步一步前進しその日を待ち続けていた同好会員に、部昇格の吉報もたらされたのは、昭和33年4月のことでした。

### 三 大学柔道部の発展

昭和33年4月1日付で同好会から部に昇格し、部員一同更に張り切って稽古に励んでいた矢先の同年5月、同好会設立以来顧問教授として、また部昇格の際にも格別のご尽力をいただいた米谷隆三先生が他界されました。後任として、当時学生部長であった福与正治先生（元学長）を顧問教授としてお迎えし、以後ご退職までの二十三年間の永きに亘って部のご指導をいただくこととなります。

昭和29年から始まった四大学柔道大会においては、昭和36年の第八回大会にして初めて優勝の美酒に酔うことができました。

昭和41年、吉田寛治先生が成蹊高校の体育教諭として赴任されました。大学柔道部の指導もお願いしたところ、快くお引き受けいただき、現在に至っております。

その後、昭和41年から43年まで、四大学柔道大会三連覇を達成し、東京学生柔道優勝大会第二部で、上位進出も

果たしております。この当時は大型選手が多く、合宿先の仙台で、たまたま当地で興業中のプロレスラーと間違えられたという、成蹊らしからぬエピソードも残っております。

一方、昭和55年の中国を皮切りに、昭和61年、62年、平成元年香港、平成4年、平成9年タイのチェンマイ大学と、海外との交流もすっかり部の行事として定着いたしました。海外遠征には、歴代の顧問教授即ち、福与正治先生、佐藤竺先生（元法学部長）、柳井道夫先生（現学長）にすべてご同行いただいております。

更に、昭和57年には、待望久しい百四十畳の新道場が完成いたしました。充実した設備はもちろんのこと、採光・通風とも申し分のないすばらしい道場です。

近年、体育会離れと言われるように、柔道部も部員不足に悩まされております。しかし、旧制高校からの伝統である先輩・後輩のたゆまぬ努力と揺がぬ団結によって、この深刻な事態を克服し、なお一層の発展を目指して努力する決意です。

成蹊学園（政経・37年）

OB会設立の機運は、昭和15年初頭頃からのようですが、その主役であった諸先輩が相ついで軍務に服したため延引し、正式に発足したのは、昭和15年10月6日でした。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発し、戦雲は急を告げることになりました。翌昭和17年には、柔道部待望の高専大会とインターハイに出場しましたが、その喜びも束の間、戦局悪化のため18年にはこの両大会共、中止のやむなきに至りました。旧制高校最後の試合は、昭和19年1月に行われた対一高戦でした。この試合には勝利を収めることができましたが、試合前の合宿中に食糧が底をつき、当時東大生だった先輩が、学校を休んで近在の農家をまわって野菜を調達したという裏話も伝え聞いております。

この時期から戦争は一段と奇烈さを増し、ついに昭和20年8月15日の終戦、そしてマッカーサー司令部による武道禁止令へと進みます。

### 二 大学柔道同好会の発足

戦後の武道禁止令も昭和25年には解除されましたが、成蹊においては、学制改革による旧制高校の消滅と新制大学への移行等の事情もあり、戦前から

の大学のように、即部活動の再開というわけにはいきませんでした。

昭和28年、一部学生の間から、柔道部復活の動きが次第に活発になり、29年4月には、新入部員を募集し、成蹊大学柔道同好会として復活しました。しかし、戦前の柔道場は、戦後の施設不足から他に転用され、約二年間は、武蔵野警察署や横河電機の道場を転々として稽古に励む日々が続きました。部活動の復活に際し、大学当局との折衝、練習場の確保等にご尽力下さり、同好会員の心の支えであったのが、旧制高校柔道部OBの谷岡喜久蔵先輩（成蹊学園名誉理事・成蹊柔道会名誉会長）であります。

昭和31年、やっと学内道場、即ち旧剣道場であった北講堂において稽古ができるようになりました。卓球部との併用で、畳の上げ下げはあったものの、その喜びは筆舌に尽し難いものがありました。しかし、この道場は同年秋、昼火事という予期せぬ事故により焼失し、道場は現大学西部室の一角（当時は西校舎と称して授業に使用）に移りました。ここも当初は卓球部との併用で、畳の移動がありました。ひとまず安心したものです。

このように同好会として復活、部昇

## 小さなみそ屋の手前味噌

飯田又右衛門

### 青梅街道筋 中野坂上付近の事

わが社は、青梅街道に面しておりますが、地下鉄丸の内線の新中野（昔は鍋屋横町と呼ばれ堀ノ内妙法寺の参道入口でした。）と中野坂上及び支線の中野新橋の三駅のほぼ中間にあります。

明治18年（1885年）初代飯田又右衛門が、この地で油又商店を創業して今年で133年になります。会社の名前はみそ屋を始めるまでは当地で雑穀商を営み、食物油を扱っていたことから「油屋の又右衛門」から「油又」と云う屋号になったと云われております。

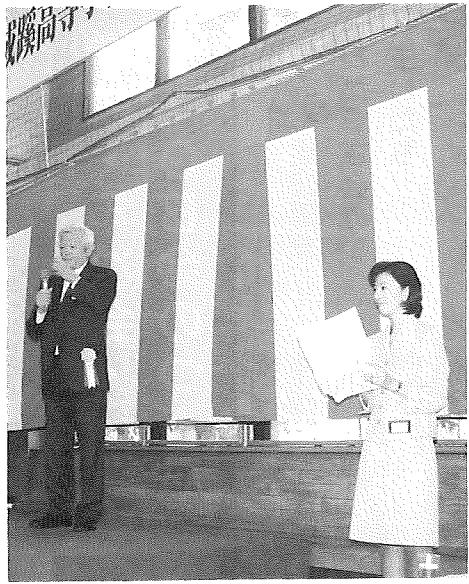


大きな話をすれば、石油が使われるようになってから灯りとしての植物油は不要となり、業態変換をしたと言う事でしょうか。

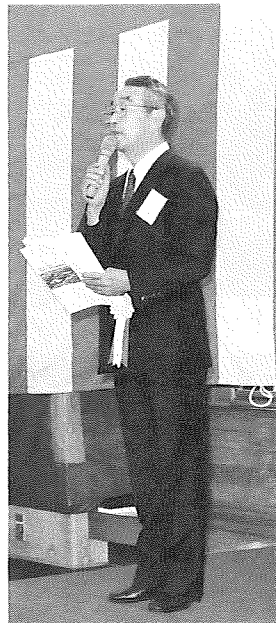
元々、中野坂上付近は昔の江戸への食物の供給基地として栄えた場所であり、戦前は田無方面から運ばれた蕎麦の製粉業社がわが社を含めて5社、みそ屋が3社、それに醤油、塩問屋、種屋等、今でも食品会社の多い土地であります。これは交通の便だけではなく、使われる水も武蔵野台地のはずれ（名前のとおり中野坂上）ということ、井の頭を源とする神田川及びその伏流水を利用できたこともあります。（現在の地下鉄丸の内線が出来るまでは地下10数mから良い水が出ておりましたが、現在は10数mの深さでないと良い水が出なくなりました。）ちなみに当地の海拔は39mです。

### 江戸甘味噌の事

正月の雑煮が父母の出身地の作り方



乾杯発声は岩崎成蹊会会長  
司会・田中滋実さん(テレビ朝日)



横地中・高校長挨拶



上原高校同窓会長挨拶



# 同窓の つどい

## 成蹊高等学校(新制) 創立五十周年祝賀同窓会

### 史上初

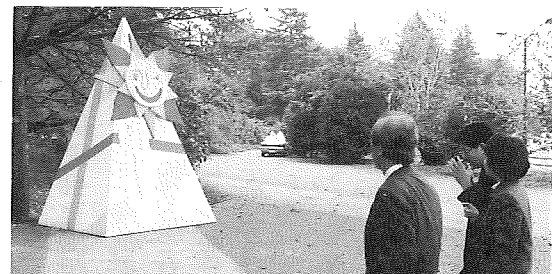
#### 千二百名の同窓会

成蹊の誇る中高生の吹奏楽団  
ウインドオーケストラの軽快な  
メロディの流れる体育館に人波  
が吸い込まれて行く。  
晩秋とは思えぬ穏やかな天候  
の十一月一日(日)、十一時三  
十分の受付開始と同時に同窓生  
が集まり出し、天幕前広場で開  
場を待ちながら友人と談笑する  
者、今年完成した中高中央館を  
現役高校生の案内で見学する者  
など大盛況を予感させた。

会場内もほぼ満員となった午  
後一時、テレビ朝日アナウン  
サー田中滋実さん(36回)の司  
会で開式、上原明高校同窓会長  
(11回)から、本日の祝賀会は  
「多くの卒業生の母校への感  
謝」「母校の現状を知り理解に  
努めよう」「同窓生の縦の友好  
を更に深めよう」「そして来る  
二〇〇二年の学園創立五十周年  
の礎石としよう」との四大テー  
マを持って開催したところ恩師  
・学園・成蹊会役員等六十余  
名、同窓生千二百名の出席をい  
ただき大変有り難いとの挨拶が



広場では開始前からあちこちに輪が



中高校門を入ればウエルカムモニュメントがお出迎え



ウインドオーケストラの伴奏に合わせて校歌斉唱

あった。  
続いて横地孝中高校長先生より「中央館の完成によりハードは整った」「今後共教育内容の充実に向けて行く」「少子化・週休五日制などの大変化もあり卒業生の支援を願いたい」旨のご挨拶があり、ついで記念樹として「ハナモモの木」並びに著名な作曲家藤田玄播氏に編曲を依頼した校歌を贈呈、早速新編曲による校歌をウインドオーケストラの伴奏で全員斉唱、岩崎英二郎成蹊会会長の音頭で乾杯、歓談に移った。  
久しぶりの再会で近況を語り合う人、姿の見えぬ友人の消息



閉会の辞を述べる岩田同窓会副会長

を確かめたり、昔と変わらぬ樺並木、グラウンドをなつかしむ声、昔に比べて余りにも立派な校舎設備の話など、会場内はそこかしこに恩師をはじめ老若男女の談笑の輪が広がった。心配された飲物・食べものも切れることなく歓談をつくす中、あつと言う間に二時間がたち、岩田矢弓高校同窓会副会長(14回)の挨拶、万歳三唱で名残りを惜しみながらの閉会となった。  
千名以上が一堂に会するパーティーは成蹊では前例がないとの事で、事前にはいろいろ心配も多かったが、混乱もなく整齊



終了後に名残惜しみつつ校門を出る

と楽しい会が持てた事は、さすが成蹊人の会との思いを深くした。これも校長先生はじめ学園、成蹊会職員の方々、現役の生徒さん達、そして同窓会各学年幹事をはじめとする皆様のお蔭と、準備に係りをもった一員として心から御礼申し上げる次第である。  
最後に社会人としての激務の中(小生を除く)、一年間に亘り毎月打合せを行い、祝賀会開催に漕ぎつけた上原会長をはじめとする十八名の実行委員の存在した事を付け加えたい。  
篠原周平(高・26年)